『枕草子』における建築空間
THE ARCHITECTURAL SPACE IN MAKURANOSOUSI若山 滋*
Shigeru WAKAYAMA

We extract the words of architectural space from MAKURANOSOUSI, classify and consider them by architectural and contextual element.

In MAKURANOSOUSI, the space esthetics of the KOUKYUU womans in the HEIAN dynasty are expressed. And MAKURANOSOUSI is regarded as the original text of good taste in Japanese culture.

As the result of this analyzing, we collect architectural space in MAKURANOSOUSI as follows.

- (1) KYUUTEI as a city of the theater
- (2) TATEGU, KAGU, KURUMA as a stage setting
- (3) esthetics of taste and circumstances
- (4) emotion from "OKASI" to "AWARE"

Keywords : literature, theater, valuation

序

「春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。

夏は、夜。月のころは、さらなり。闇もなほ。螢のおほく飛びちがひたる、また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るも、をかし。

秋は、夕ぐれ。夕日のさして、山のはいと近うなりたるに、鳥の、寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ、三つなど、飛びいそぐさへ、あはれなり。まいて、雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風のおと、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬は、つとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜のいと白きも。またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、ぬるくゆるびもてゆけば、火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし。」(1)

『枕草子』は、冒頭から、春は朝がいい、夏は夜がいい、というような、季節による、時と状況の評価であり、それも全く独断的にきめつけている。清少納言『枕草子』には、全編にこの独断・評価の気分がみなぎっている。「よし」「わろし」「をかし」「めでたし」「にくし」「わびし」「くちおし」「ゆかし」など、ありとあらゆる生活様態の評価の書であるといつてよく、その評価の基準は、単なる個人的な趣味の感覚によっている。それは日本文化における「趣味の良さ」の原典のようなもので、このとき既に、今日われわれが感じている「日本の趣味」というものの大筋は確立されたと思われる。もちろんそれは、平安王朝の後宮女性という、極めて特異な存在によ

るものではあるが、特異であるからこそむしろ、その力は広く長く後世にまで伝わりえたのではなかろうか。

さて文学は、それを読む人に何らかの心象風景を想起させるものだが、その風景には自然空間とともに建築空間が存在する。そこに表れる建築空間は現実そのものというより、作者の心に映じたものの言語化であり、虚構としての文学に表現されたものは、史実としての記録に表現されたものとは質の異なるものである。つまり文学の中の建築空間は、一旦人間の感情のフィルターを通過したものであって、そこにわれわれが読み取るものは、建築そのものであるとともに、その時代、その文化の、人間の建築空間に対する情感である。

本論の目的は、『枕草子』に表れる建築空間を調べることによって、この時代の人間の建築空間に対する情緒性について考察するとともに、平安時代の建築空間に対する人間の建築空間情緒といったものを、読み取ろうとするものである。

1. 『枕草子』の位相と構造

『枕草子』は、菅原道真によって遣唐使が廃止され(894年)、『古今和歌集』が編まれて(905年)後の、国風文化華やかかなりし頃、一条天皇の中宮定子の女房、清少納言による、一種の随筆である。成立は1000年頃とされるが、諸説ある。紫式部の『源氏物語』と並ぶ平安王朝女流文学の代表であるが、この時代には、多くの日記随筆文学、物語文学が、女性の手によってなされ、

* 名古屋工業大学 助教授・工博

Associate Prof. of Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

『枕草子』はその一方を代表するものといっている。

定子は、中の関白藤原道隆の娘である。この時代は、藤原鎌足の子の不比等の子達によって分れた、藤原4家の内の北家の全盛時代であり、この一族は、政治の実権を握る摂政関白を独占していた。つまり、作者清少納言は、位を究めた一族の娘の華やかな後宮に仕えていたわけで、その筆の走りにも、この世の頂上にいるという自信と高慢が表われている。

しかし、道隆が関白でいるうちはよかったが、没してからは、時の権力がすっかり、道隆の弟に当たる、御堂関白藤原道長のほうに移ったため、道長方と折り合いの悪かった定子の兄弟たちは皆落ちぶれ、定子も落飾し、清少納言の晩年も不幸であったと伝えられている。その道長の娘で、やはり一条天皇の中宮であった彰子に仕えていたのが、紫式部であり、その『紫式部日記』の中に、清少納言のことを記した有名な一節がある。

「清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真字かきちらして侍るほども、よく見れば、まだいとたへぬことおほかり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行くすゑうたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすごうすずろなる折も、もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづから、さるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のては、いかでかはよく侍らむ。」

と、かなり手厳しい評であるが、確かに『枕草子』には、ややともすればうんざりするほど、自己の才気を人に褒められた話、また中宮定子の美しさ雅やかさを自慢する話が多く現われる。そこにはこういう世界で妍を競い、才を競う女性特有の、見栄と虚栄が顔をのぞかせているともいえる。

伝本には多種あり、詳述は省くが、本研究に使うものは300近い段に分かれ、その後「一本」とされるものが続く。格段は、「家は」「市は」「すさまじきもの」などで始まり、その下にそれに続くものを列挙する形の「類集」、自然や人生に関する感想を記す「随想」、中宮定子を中心とした宮廷生活の日記「回想」に分けられるが、中でも「類集」は『枕草子』の特色をもっともよく表すもので、ものごとの断定的評価を成す部分である。

2. 研究の方法

まず建築空間を表わす用語を抽出するが、和歌文学の場合とは性格が異なることから、次のように、建築要素と文脈要素の二軸によって分類し集計する。

建築要素とは、建築空間を、建築、部屋、部位、部材・建具、家具、庭、その他、と分類したもので、ここでは直接的な建築に限定せず、庭の自然や、車なども、幅広く抽出の範囲としている。文脈要素とは、その用語が、一般名、場所名、人名、機関名を指す場合によって分け、更に一般名、場所名の場合はそれが、行為の舞台か、行為の対象か、美的対象かによって分類したものである。

以下に、その解説と用語例を示す。

＜建築要素＞

イ：建物	建物全体、棟（家、屋、里など）
ロ：部屋	部屋、建物の空間的な部分（局、縁、渡殿など）
ハ：部位	建物の物質的な部分（軒、窓など）
ニ：部材・建具	部材・部屋の仕切り（柱、簾、格子など）
ホ：家具	家具、室内調度類（几帳、火桶など）
ヘ：庭	庭全体、庭の構成物（庭、池、花など）
ト：その他	生活空間を表す語で上記に含まれないもの（車、都など）

＜文脈要素＞

A：一般名	建築の一般的な名称（家、縁、簾など）
B：場所名	固有の建築を表わすものの中で場所、建物を意味する名称（職の御曹司、殿上など）
C：人名	建築を表わす語の中で人を指す名称（殿、左京の君など）
D：機関名	建築を表わす語の中で組織、団体を指す名称（主殿司、瀧口など）

一般名・場所名の文脈による分類

a：行為の舞台	行為が行われている所及びその背景となっている場合
b：行為の対象	建築を指す語に対して行為が行われている場合
c：美的対象	美的な言葉に修飾されたり、修飾したりする場合。また和歌に詠まれた場合

本研究における建築用語の抽出は、一般的な三巻本の岩瀬文庫のものを底本としている、岩波書店・日本古典文学大系・『枕草子 紫式部日記』¹⁾。及び、やはり三巻本の陽明文庫のものを底本とした、新潮社・新潮日本古典集成・『枕草子』（上・下）^{2),3)}により、本文中の引用は全て後者によった。

建築学の分野における古典文学を資料とする既往の研究としては、木村徳国『上代語にもとづく日本建築史の研究』⁴⁾がある。これは『古事記・日本書紀・万葉集』を資料として、日本古代の建築用語（家、やどなど全体を表す語に限る）の意味について研究するものである。また、小野恭平『中古の文学作品からみた山里の基本的イメージとその美について』⁵⁾では「山里」の語に限って考察している。『源氏物語』に関して、太田静六氏⁶⁾、池浩三氏⁷⁾などのものがある。しかし、本研究のような『枕草子』の建築空間を系統的に抽出し研究したものは、

表一 全編における分類別頻度

		文 脈 要 素							計
		建 築 用 語				一般名・場所名の			
		物を指す語		人を指す語		文脈による分類			
		一般名	場所名	人名	機関名	行為の舞台	行為の対象	美的対象	
建 築 要 素	建 物	2 1 1 (11.9)	1 9 4 (11.0)	1 8 8 (10.7)	2 9 (1.6)	2 0 6 (11.7)	1 0 7 (6.1)	9 2 (5.2)	6 2 2 (35.3)
	部 屋	1 4 6 (8.3)	4 8 (2.7)	1 (0.1)		1 3 0 (7.4)	5 8 (3.3)	6 (0.3)	1 9 5 (11.1)
	部 位	1 9 (1.1)				1 2 (0.7)	3 (0.2)	4 (0.2)	1 9 (1.1)
	部 材 ・ 建 具	1 5 2 (8.6)	1 (0.1)			5 8 (3.3)	8 9 (5.1)	6 (0.3)	1 5 3 (8.7)
	家 具	1 9 6 (11.1)	2 (0.1)		2 (0.1)	4 2 (2.4)	1 2 0 (6.8)	3 6 (2.0)	2 0 0 (11.4)
	庭	4 1 9 (23.8)			2 (0.1)	7 4 (4.2)	1 1 3 (6.4)	2 3 2 (13.2)	4 2 1 (23.9)
	そ の 他	1 2 5 (7.1)	2 1 (1.2)	4 (0.2)		3 2 (1.8)	8 4 (4.8)	3 0 (1.7)	1 5 0 (8.5)
	計	1 2 6 8 (72.0)	2 6 6 (15.1)	1 9 3 (11.0)	3 3 (1.9)	5 5 4 (31.5)	5 7 4 (32.6)	4 0 6 (23.1)	1 7 6 0

文脈要素

図一 全編における建築要素別の建築用語の比較

図二 全編における建築要素別の一般名・場所名の文脈による分類の比較

国文学の分野にも見当たらない。

3. 『枕草子』における建築空間を表す用語の概要

建築用語の、この二軸による分野別頻度が表一であり、頻度の多い用語を挙げたのが表二であり、各分類ごとの多頻度用語が表三である。これをグラフ化したものが図一、図二である。

まず注目されるのが、「御車、車」の多いことである。後宮の女性がでかけるときには、車が欠かせない乗り物となっており、車に関する趣味のよしあしを論じた部分が多いことを示している。次に多いのが、「宮」「殿」などの用語であるが、これはほとんどが人物を表わしている。また「御簾・簾」「御几帳・几帳」「御屏風・屏風」など建築内部の建具、家具が多いのが、『万葉集』⁸⁾などと大いに異なる点である。美的対象としてはやはり、「庭」が多く、その評価意識は「花」に集中している。

4. 劇場都市としての宮廷

『万葉集』において多く見られた「宮」や「殿」はここでは人物を指すようになっており、時代の変化が感じられるが、「宮」はたいていは中宮定子、「殿」は多く関白道隆を指している。貴人を指すのに建築空間を用いるのは、この時代には当たり前となっており、『源氏物語』にもこの傾向が強く、そのためにわれわれにはそれが誰を指すのか分かりにくくなっている。位の高い人物の名を直接口に出すのははばかれるという、日本的な感性によるものであろう。

『万葉集』の建築空間が、外部、それも「遠望の空間」⁹⁾に偏っていたのに対して、ここでは、建築の内部空間が圧倒的である。「車」が多いというのも、それは言うてみれば「移動する内部空間」であることを意味している。『枕草子』はほとんどが、宮廷内部の、人物の振る舞いを描いている。人物とは天皇、中宮、関白、その他の公達、女官、僧などで、その振る舞いをほめたりけなしたりしているのである。「なによりも人のふるまひ、心のよしあしのたたずまひを教へたるものなり」という教養書的な受け取り方¹⁾もあるようだが、私は、これは全く個人的な、趣味的美学の書であると考え。そこに登場する人物は、あたかも舞台のうえで演技する役者のように、その日常の立ち振る舞いを審美されてい

表一2 全編における建築用語の頻度順

用 語	頻 度	建築要素
御車・車	96	Ⅶ
上・うへ	60	I
宮	56	I
御家・家	48	I
御簾・簾	48	Ⅳ
殿	36	I
御几帳・几帳	35	V
御花・花	31	Ⅵ
御局・局	30	Ⅱ
御門・門	20	I
里・さと	20	I
内裏・内・うち	19	I
御屏風・屏風	19	V
木	17	Ⅵ
御格子・格子	16	Ⅳ
職の御曹司・職	15	I
庭	14	Ⅵ
菖蒲	14	Ⅵ
火桶	13	V
桜	13	Ⅵ
梅	13	Ⅵ
御輿	13	Ⅶ
御棧敷	12	I
主殿司	12	I
屋	11	I
御畳・畳	11	V

I: 建物
II: 部屋
III: 部位
IV: 部材・建具
V: 家具
VI: 庭
VII: その他

るのである。これは、宮廷という劇場における、人間の交遊の様を、あたかも劇を見るように描いているのであり、一つ一つの建築空間はその舞台となっている。この時代の宮廷は、人と人との演技の相互鑑賞の場であり、その演技の場面に、儀式があり、祭りがあり、季節の行事があり、花鳥風月という文化があったのである。多くの棟が渡り廊下でつながったこの時代の寝殿造りは、一つの街のような空間の複層性を持ち、特に、内裏という、閉ざされた巨大な建築の複合世界は、様々な種類の殿上人たちが交遊する一つの都市空間といってもよいようなものであった。

劇場では「観る」ということが重要である。『枕草子』においても人が人を観る、人が花鳥風月を観るという場面が極めて多く、その観たさまが、美しく、立派で、風情があるというのが「をかし」という評価になるのである。その観るため、あるいは隠すための道具立てが「御簾・簾」「御几帳・几帳」「御屏風・屏風」「御障子・障子」であり、こういった視線を調節する建具、家具が、この劇場ではちょうど舞台の「幕」の役割を果しているのである。

「20段」「清涼殿の丑寅の角の、北のへだてなる御障子は、荒海の絵。生きたるものどものおそろしげなる、手長・足長などをぞ描きたる。上の御局の戸をおしあげたれば、つねに目に見ゆるを、憎みなどして、笑ふ。

高欄のもとに、青き瓶の大きなるを据えて、桜のいみじうおもしろき枝の、五尺ばかりなるをいと多く插したれば、高欄の外まで咲きこぼれたる屋つ方、大納言殿、桜の直衣のすこしなよらかなるに、濃き紫の固文の指貫、白き御衣ども、うへには濃き綾のいとあざやかなるを出だしまるりたまへるに、主上のこなたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷にゐたまひて、ものなど申したまふ。

御簾のうちに、女房、桜の唐衣どもくつろかに脱ぎ垂れて、

表一3 全編における頻度の高い用語

	一般名	場所名	人名	機関名	行為の舞台	行為の対象	受動対象
建物	御家・家(47) 御門・門(20) さと・里(20) 御社数(12) 屋(10)	職の御曹司・職(15) 内裏(14) 東宮・東宮(6) 賀茂の社・賀茂(6)	うへ・上(52) 宮(48) 殿(32) 院(8) 遊樂舎(7)	主殿司(12) 通口(4) 内侍(2) 内裏(9)	御家・家(32) さと・里(14) 職の御曹司・職(11) 内裏(9)	御門・門(15) 障(6) 左衛門の障(6) 寺(6) 内裏(5)	庭(7) 飯屋(3) 立の庭・庭のいほり(3) 賀茂の社・賀茂(2)
部屋	御局・局(30) 縁(9) 下(9) 廊(8) 廊(7)	殿上(17) 台所(5) 上の御局(5) 宿所(2) 侍の曹司(1)	台所の方(1)	殿上(12) 下(8) 廊(7) 縁(6)	御局・局(18) 殿上(5) 上の御局(3) 縁(3) 宿所(2)	廊(1) 廊上(1) 侍の曹司(1) 内裏の局(1) 細殿(1)	
部位	帷皮張の屋・帷皮張(3) 屋形(2)			五ふき(2)	とじきみ(1) 屋形(1) 西障(1)	帷皮張の屋・帷皮張(2) 石灰の壁(1) 軒(1)	
部材・建具	御簾・簾(48) 御格子・格子(16) はしら・柱(12) 御障子・障子(8) 長押(7)			御簾・簾(19) 立窓(5) 柱(5) 御格子・格子(4) 御障子・障子(4)	御簾・簾(29) 御格子・格子(12) はしら・柱(8) 戸(5) 長押(5)	細殿の障(1) 伊予障(1) 通戸(1) 障子(1) 帷障(1)	
家具	御几帳・几帳(35) 御屏風・屏風(19) 御火桶・火桶(12) 御畳・畳(11) 褥(9)	台盤(1) 一の障(1)		御几帳・几帳(7) 御簾(5) 燈台(2) 床蓆(2) 御障子・障子(2)	御几帳・几帳(26) 御屏風・屏風(12) 褥(9) 火桶(8) 床蓆(6) 畳(6)	御屏風・屏風(6) 火桶(4) 畳(2)	
庭	花(31) 木(17) 菖蒲(15) 庭(14) 桜・桜の花(13)		出居の少将(1) 西障の主人(1)	花(6) 庭(5) 木(4) 梅・紅梅(4) 桜(3)	西障(9) 木(8) 花(7) 梅の花・梅の木・紅梅(6)	花(18) 桜・桜の花・桜の葉・桜のはなびら(7) 池(5) 庭(5)	
その他	御車・車(95) 御輿(13) 邸(5) 袴裾毛(2) 朝代(2)	西の京(2) 浜名のはし(1)	左京の君・左京(2) 右京の君・右京(2)	御車・車(20) 御輿(3) 西の京(2) 所(2) 邸(2)	御車・車(71) 御輿(10) 邸(1) 袴裾毛(1) 朝代(1)	車(5) 浜名のはし・浜名の橋(2)	

藤・山吹など、いろいろ好ましくてあまた、小半部の御簾よりもおし出でたるほど、昼の御座のかたには、御膳まるる足音たかし。警蹕など『おーしー』といふ声きこゆるも、うらうらとのどかなる日のけしきなど、いみじうをかしきに、はての御盤とりたる蔵人まるりて、御膳奏すれば、中の戸よりわたらせたまふ。御供に、廂より大納言殿、御送りにまゐりたまひて、ありつる花のもとに帰りゐたまへり。

宮の御前の、御几帳おしやりて、長押のもとに出でさせたまへるなど、なにとなくただめでたきを、さぶらふ人も思ふことなき心ちするに、『月も日もかはりゆけどもひさにふる三室の山の』といふ言を、いとゆるらかにうち出だしたまへる、いとをかしうおぼゆるにぞ、げ

に、千年もあらまほしき御ありさまなるや。」

「うへ」は一条天皇、「宮」は中宮定子、大納言は定子の兄伊周を指している。これは天皇、中宮、大納言が、ある空間に登場するさまを描写して、その美しさをたたえている部分である。その道具だてに極めて多くの建築の部分、御障子、戸、勾欄、戸口、板敷、御簾、廂、御几帳、長押、などが使われており、そういった舞台道具とともに登場する人物の、振る舞いの見事さが、「なよろか」「あざやか」「をかし」「めでたき」などの言葉で表現されている。

「99段」「夜半ばかりにわたらせたまひしかば、いくばくもあらで、明けぬ。登花殿の、東の廂の二間に、御しつらひはしたり。宵にわたらせたまひて、またの日はおはしますべければ、女房は、御膳宿に向かひたる渡殿に、さぶらふべし。

殿・上、暁に、一つ御車にてまゐりたまひにけり。早朝、いと疾く御格子まゐりわたして、宮は、御曹司の南に、四尺の屏風、西東に御座敷きて、北向きに立てて、御畳の上に御茵ばかり置きて、御火桶まゐれり。御屏風の南、御帳の前に、女房いと多くさぶらふ。」

「御膳のをりになりて、御理髪まゐりて、蔵人ども、御陪膳の髪上げて進らすほどの、隔てたりつる御屏風もおしあけつれば、垣間見の人、隠れ蓑とられたる心ちして、飽かずわびしければ、御簾と几帳との中にて、柱の外よりぞ、見立てまつる。衣の裾・裳などは、御簾の外にみなおし出だされたれば、殿、端の方より御覧じ出だして、『あれは、誰ぞや。かの御簾の間より見ゆるは』と、咎めさせたまふに、『少納言が、ものゆかしがりて、はべるならむ』と申させたまへば、『あな、恥づかし。かれは、古き得意を。『いと憎さげなる娘ども持たり』ともこそ、見はべれ』などのたまふ御気色、いとしたり顔なり。』

これは淑景舎（桐壺）に住む、東宮の妃となる関白道隆の娘、つまり定子の妹が来るのでその様子を見ようという話で、淑景舎、中宮定子、関白道隆、および清少納言本人の姿が描かれている。ここでは、廂、屏風、簾、几帳、畳、格子、障子、柱、などとともに、登場人物の衣装がよく描かれており、女性らしく実にこまやかな観察眼が発揮されている。

外出時必ず車に乗る宮廷女性にとって、車もまた重要な「観る、あるいは観られる」ための舞台であった。

「94段」「卯の花の、いみじう咲きたるを折りて、車の簾・側などに挿しあまりて、襲ひ・棟などに長き枝を、葎きたるやうに挿したれば、ただ、卯の花の垣根を、牛にかけたるとぞ見ゆる。供なる郎等もいみじう笑ひつつ、ここまだしここまだしと挿しあへり。」

「220段」「万づのことよりも、わびしげなる車に、装束わなくて物見る人、いともどかし。説経などは、いとよし。罪うしなふことなれば…。それだになは、穴がちなるさまにては見苦しきに、まして、祭などは、見でありぬべし。下簾なくて、白き単衣の袖なうち垂れてあめりかし。ただ、その日の料と思ひて、車の簾も仕立てて、『いと口惜しうはあらじ』と、出でたるに、まさる車など見つては、『何しに』とおぼゆるものを…。まいて、いかばかりなる心にて、さて見るらむ。』

などに、車をめぐる女性の見栄と虚栄がよく表れている。あたかも現代のマイカー時代をほうふつとさせるような状況がこの時代にもあったのだと思われて興味深い。

車の種類については次のような感想を述べている。

「29段」「檳榔毛は、のどかにやりたる。急ぎたるは、わるく見ゆ。

網代は、走らせた。人の門の前などよりわたりたるを、ふと見やるほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、『誰ならむ』と思ふこそ、をかしけれ。ゆるゆると久しくゆくは、いとわろし。』

「一本」の「22」にも同様の記述がある。つまり檳榔毛の車は造りも手の込んだ高級車であるから、ゆっくりと走るのがよく、あまりせかせかとしているのは品がないが、網代の車は機能を重視した軽快な造りであるから、走るという機能を十分に発揮するのがいいのだという、形態と機能の組み合わせの美を評価しているのが面白い。

5. 趣味の良さの原典—空間美学

先に述べたように、『枕草子』はあらゆる生活様態の美学的評価の書であり、日本の趣味の良さの原典のようなものであるが、その評価の対象は、人間の振る舞い、その衣装、自然の草花などとともに、建築空間にも及んでいる。その内容を考察すると、各段の建築空間評価の仕方には次のようなタイプがある。

A：直接的な評価—「類集」における、ものづくりのように、はっきりと断定的にものよしあしを決めつけているもの

B：間接的な評価—人物の振る舞いの評価、行事や季節の評価に絡んで、その周辺の建築空間が間接的に評価されるもの

C：一般的な記述—単にある情景を説明する中に、微細な評価が感じられるもの

先に上げた、天皇や定子、関白、淑景舎などの振る舞いを評価する中に表れるものは(B)に当たるのであるが、ここでは特に(A)の直接的評価を考察することによって、『枕草子』の美学の性質を明らかにしようとする。

「25段」「忍びて来る人見知りて、吠ゆる犬。

あながちなるところに隠し伏せたる人の、軒市たる。また、忍び来るところに、長烏帽子して、さすがに『人に見えじ』と、まどひ入るほどに、物につきさはりて、『そよろ』といはせたる。伊予簾などかけたるに、うちかづきて、『さらさら』と鳴らしたるも、いとにくし。帽額の簾はまして、小端のうちおかる音、いとしるし。それも、やをら引き上げて入るは、さらに鳴らず。遣り戸をあらく閉て開くるも、いとあやし。すこしもたぐるやうにして開くるは、鳴りやはする。あしう開くれば、障子なども、ごほめかしうほとめくこそしるけれ。』

人目をしのんでくる、という状況のときに、簾や遣り戸、障子などの音を立てるのは大変困る、ということで、後に続く「開けて出で入るところ、閉てぬ人、いとにくし。』

とともに、建具の扱いを評価している。

「57 段」「よき家の、中門あけて、檳榔毛の車の白く清げなるに、蘇枋の下簾、にほひいときよらにて、榻にうちかけたるこそ、めでたけれ。」

家と車の好ましいコンビネーションを評価している。

「84 段」「なまめかしきもの。ほそやかにきよげなる君達の、直衣姿。をかしげなる童女の、表の袴などわざとはあらで、ほころびがちな汗衫ばかり着て、卯槌・葉玉など長くつけて、高欄のもとなどに、扇さしかくしてゐたる。

薄様の冊子。柳の萌え出でたるに、青き薄様に書きたる文つけたる。三重がさねの扇。五重はあまり厚くなりて、もとなど憎げなり。

いと新しからず、いたうもの旧りぬ檜皮葺きの屋に、長き菖蒲をうるはしう葺きわたしたる。

青やかなる簾のしたより、几帳の朽木形いとつややかにて、紐の吹きなびかされたる、いとをかし。

白き組の、細き。

帽額あざやかなる簾の外、高欄に、いとをかしげなる猫の、赤き頸綱に白き札つきて、鎖の緒、組の長きなどつけて、曳きありくも、をかしうなまめきたり。」

「なまめかしい」とは優美という程度の表現、少し古びた檜皮葺きの屋根にしょうぶをきちんと葺き渡している、青々とした御簾、几帳の帷子の色鮮やかなもの、その紐が風になびいている様、簾と猫の様子を組み合わせをほめたてる。

「124 段」「九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の、今朝はやみて、朝日いとけざやかに射出でたるに、前栽の露は、滾るばかり濡れかかりたるも、いとをかし。透垣の羅文・軒の上などは、掻くいたる蜘蛛の巣の毀れ残りたるに雨のかかりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれに、をかしけれ。」

九月の雨夜の後の朝日が鮮やかな中に、透垣、軒のあわれな風情を楽しんでいる。季節を限定し、朝日、露、蜘蛛の巣、雨の白い玉などと一体となった「あはれ」の美学を明らかにしている。

「156 段」「昔おぼえて不明なるもの。暈網端の畳の、節出で来たる。唐絵の屏風の、黒み、面そこなはれたる。絵師の、目暗き。七、八尺の鬘の、赤くなりたる。葡萄染の織物の、灰かへりたる。色好み、老いこずはれたる。おもしろき家の、木立焼け失せたる。池などは、さながらあれど、浮草・水草など、茂りて…」

昔はよかったが今はだめなものは、上等の畳、唐絵の古くなったもの、いい家の木立の焼けてしまったもの、というわけで、やや否定的な評価だが、ここにも「あはれの美学」が見え隠れしないでもない。

「170 段」「六位蔵人などは、思ひかくべきことにもあらず。冠得て、何の権守・大夫などいふ人の、板屋などの狭き家持たりて、また、小櫓垣などいふもの新しくして、車宿にに車ひき立て、前近く一尺ばかりなる木生はして、牛つなぎて草など飼はするこそ、いと憎けれ。

庭いと清げに掃き、紫革して伊予簾懸けわたし、布障子張らせて、住まひたる、夜は、『門つよく鎖せ』など、言おこなひたる、いみじう生ひ先なう、心づきなし。

親の家・舅はさらなり、叔父・兄などの、住まぬ家、その

さべき人なからむは、おのづからむつまじくうち知りたらむ受領の、国へいきていたづらならむ、さらずば、院・宮ばらの、屋あまたあるに、住みなどして、官待ち出でて後、いつしかよきところ尋ね取りて、住みたるこそよけれ。」

現職を去った人が、小さな家をこざれいにしてるのは、先もないと思われてよいものではない、ということで、少納言の生活の美学はなかなか手厳しい。

「171 段」「女ひとり住むところは、いたくあばれて、築土なども全からず、池などあるところも、水草る、庭なども、蓬に茂りなどこそせねども、ところどころ、砂の中より青き草うち見え、淋しげなるこそ、あはれなれ。

ものかしこげに、なだらかに修理して、門いたく固め、きはぎはしきは、いとうたてこそおぼゆれ。」

女の一人住まいは、土塀も崩れがちで、庭も寂しげなほうがよい、よく修理し、門も厳重にしているのはよくないという、現代の感覚ではやや奇異な印象も受ける美的評価である。女の一人住いを「あはれ」とむすびつける、興味深い意見である。

「188 段」「野分のまたの日こそ、いみじうあはれに、をかしけれ。

立藪・透垣などの乱れたるに、前栽どもいと心苦しげなり。大きな木どもも倒れ、枝など吹き折られたるが、萩・女郎花などの上に、横ろびひ伏せる、いと思はずなり。格子の壺などに、木の葉をことさらにしたらむやうに、こまごまと吹き入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとはおぼえね。」

風のための、庭などが乱れているのも、心にしみるもの、という評価である。

「216 段」「大きにて、よきもの。家。餌袋。ほうし。果物。牛。松の木。硯の墨。」

大きいほうがいいものの中に家も入っているわけだが、他のものとの並列が面白い。

「218 段」「人の家につきづきしきもの。臂折りたる廊。円座。三尺の几帳。大きやかなる童女。よき半物。侍の雑仕。折敷く。懸盤。中の盤。おはらき。衝立障子。攪き板。装束よくしたる餌袋。唐傘。棚廚子。提子。鉋子。」

家にはこういうものがあつたほうがよいということ。

「233 段」「雪は、檜皮葺、いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。まだいと多うも降らぬが、瓦の目毎に入りて、黒う丸に見えたる、いとをかし。時雨・霰は、板屋。霜も、板屋、庭。」

天候と屋根の組み合わせの美学である。雪は檜皮葺、瓦葺がよく、時雨、霰、霜は板屋がいいという。まさにそのとうりで、鋭い感覚といわざるをえない。

「238 段」「騒がしきもの。走り火。板屋の上にて、烏の、斎の生飯食ふ。」

これも面白い。同じ板屋の音でも時雨はいいが、烏はうるさいという。

「259 段」「また、高麗端の席青うこまやかに厚きが、縁の文いとあざやかに黒う白う見えたるを、ひき展げて見れば、『なにか、なほこの世は、さらにさらに得思ひ捨つまじ』と、命さえ惜しくなむなる」

青くて編み目が細く厚みのある畳の縁の模様の美しさに、命も惜しいというほどの感激をしている。感性の鋭

い女性ゆえのことだろう。

「一本」のうち

「5」「下の心、構へてわろくて、清げに見ゆるもの。唐絵の屏風。石灰の壁。盛物。檜皮葺きの屋の上。河尻の遊女。」

内側は悪くて表面だけよく見えるものの意。

「13」「硯の笥は、重ねの、蒔絵に雲鳥の文。」

「17」「櫛の笥は、蛸絵、いとよし。」

「18」「鏡は、八寸五分。」

「20」「火桶は、赤色。青色。白きに造り絵も、よし。」

「21」「畳は、高麗端。また、黄なる地の端。」

家具調度、それぞれの好みを述べる。

以上のような空間評価の特徴としては、建築空間そのものを美しいとか、醜いとかいうのではなく、空間にまつわる「風情」に焦点が当てられていることである。空間にかかわる「をかし」という評価はあくまで、人、季節、雪や時雨などの天候、との関係に置いてなされるのであって、空間そのものをいう場合は極めて少ない。ここに取り上げた「直接的な評価」の部分においてもそのようなのであり、人の振る舞いや、季節の行事の脇役としての「間接的評価」においてはなおさらそうである。

つまりこの美学は、風情の美学であり、状況の美学である。もちろん著者が女性であるということにもよろうが、これはある意味で、日本文化の特質と、また日本建築の物理的な特質ともかかわっていると思われる。

清少納言の空間趣味の特質としては、やはり「優美なもの」「清らかなもの」「華やいだもの」などに評価が置かれているが、女性らしく「細かいもの」「風にたなびく弱々しいもの」などに特徴が見られる。また面白いのは、「古錆びたもの」「荒れ果てたもの」「崩れかけたもの」などを美的に評価している点で、現代の感覚とはかなり異なった「あはれ」の美学を感じるころである。特に関白道隆が亡くなって定子の後宮に勢いのなくなった後半の段に、そういった「あはれ」の趣味が目立っているようだ。『枕草子』は基本的には、社会の頂点にある文化サロンを描いた華やかな空間性の書であるが、そこにも少しづつ、物寂しい「あはれ」の空間美学が顔を出してくるのである。

結・『枕草子』の建築空間

以上のような分析の結果として、『枕草子』の建築空間は次のようにまとめられる。

(1) 劇場都市としての宮廷

『枕草子』は平安王朝における後宮の生活を事細かに描写し、評価した書であるが、そこには渡殿でつながった、複合的な建築としての寝殿造りの空間が、あたかも一つの都市のように描かれており、そこに現れる殿上人の生活は、その都市空間の中の文化サロンにおける、お互いの振る舞いを鑑賞し、評価しあうという、演劇的なものである。『枕草子』における宮廷空間は劇場都市ともいえるようなものであった。

またここでは、『万葉集』のような和歌文学と比べると、建築の内部空間が圧倒的に優勢である。

(2) 舞台装置としての建具、家具、車

宮廷文化サロンの舞台には様々な装置、道具が登場するが、中でも重要なのが、格子、障子、簾、几帳、屏風、などの建具、家具で、これらは人の視線を隔て、調整する舞台装置として、なくてはならないものであった。また車もここでは動く舞台として扱われている。『枕草子』に登場する建築空間はこれらがほとんどといってよい。

(3) 風情と状況の美学

『枕草子』は劇場的な空間における生活様態の美的評価の書であるが、その評価の仕方は、極めて私的で趣味的であり、また空間そのものの構造ではなく、ある状況における風情を評価するのであり、風情と状況の美学というべきものである。

(4) 「をかし」から「あはれ」へ

清少納言の建築空間評価の基本は、「華やか」「清らか」「細い」「柔らかい」など、いかにも女性的なものであり、そこに、人の振る舞い、季節の自然、行事などが調和したときに「をかし」という評価を与えているのであるが、そこに少しづつ、「錆びれた」「物寂しい」つまり「あはれ」というべき空間の評価が加わってくる。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力頂いた、当時研究室の学生であった、長尾環美さんに、深謝の意を表します。

参考文献

- 1) 池田亀鑑ほか2名：日本古典文学大系19・枕草子・紫式部日記、岩波書店、1958.9, pp.27-28「斯波義将の竹馬抄には…教養書としてうけとっている。」による。
- 2) 萩谷 朴：新潮日本古典集成・枕草子上、新潮社、昭和52.4
- 3) 萩谷 朴：新潮日本古典集成・枕草子下、新潮社、昭和52.5
- 4) 木村徳国：上代語にもとづく日本建築史の研究、中央公論美術出版、昭和63.2
- 5) 小野恭平：中古の文学作品からみた山里の基本的イメージとその美について：日本建築学会計画系論文報告集、第393号、pp.72-81
- 6) 太田静六：寝殿造の研究、吉川弘文館、昭和54
- 7) 池 浩三：源氏物語—その住まいの世界、中部建築ジャーナル、1987.5-1987.11
- 8) 若山 滋ほか1名：『万葉集』における建築空間：日本建築学会計画系論文報告集、第388号、pp.116-123、1988.6による
- 9) 大野 晋ほか2名：岩波古語辞典、岩波書店、1974.12
- 10) 池田亀鑑：平安朝の生活と文学、角川文庫、昭和39
- 11) 前 久夫：文学の舞台—住まい、東京美術、昭和61.1
- 12) 市古貞次ほか9名：日本古典文学大辞典—簡約版、岩波書店、1986.12

(1989年5月10日原稿受理、1990年2月26日採用決定)